



平成23年12月13日

慢性炎症性疾患の病態解明に道-新規治療薬の開発に期待

＜概要＞ 本学医歯薬学総合研究科消化器・肝臓内科学分野の山本和秀教授と岡山大学病院消化器内科の三宅康広助教、松本和幸医員のグループが、慢性炎症性疾患患者の血清中からリンパ球表面に発現する Programmed cell death-1 という補助刺激分子に対する自己抗体を発見した。慢性炎症性疾患にはクローン病や自己免疫性肝炎等の自己免疫性疾患と B 型慢性肝炎や C 型慢性肝炎等の慢性ウイルス性疾患が含まれ、病気が進行すると臓器不全や発癌に至る。今回発見した自己抗体に注目して開発を行っていくことで、今後、新たな検査方法や治療薬の開発に応用できるものと期待されている。

＜内 容＞

- クローン病や自己免疫性肝炎等の自己免疫性疾患患者及びC型慢性肝炎等の慢性ウイルス感染症患者の血清中から、リンパ球表面に発現する Programmed cell death-1 (PD-1) という補助刺激分子に対する自己抗体 (抗 PD-1 抗体) を発見しました。
- PD-1 は活性化されたリンパ球表面に発現しリンパ球の働きを負に制御することで、炎症の慢性化を制御しています。今回の発見により、慢性炎症性疾患患者の血液中に存在する抗 PD-1 抗体が PD-1 の働きを阻害することで炎症の慢性化に繋がっていると考えられます。
- 抗 PD-1 抗体の陽性率は、健常人では 3%と低いですが、クローン病患者では 84%、自己免疫性肝炎患者では 63%、B 型慢性肝炎患者では 87%、C 型慢性肝炎患者では 70% と慢性炎症性疾患患者において明らかに高率でした。
- 抗 PD-1 抗体をマーカーとすることにより、自己免疫性肝炎と薬物性肝障害等これまで鑑別診断に有効な検査方法のなかった疾患の鑑別が可能になると考えられます。
- 今後、抗 PD-1 抗体に注目して研究を続けることで、現在自己免疫性疾患の治療薬として使用されているステロイドホルモン剤や免疫抑制剤に変わる新しい治療薬の開発が可能になると期待されます。

＜お問い合わせ＞

岡山大学病院消化器内科

助教 三宅 康広

(電話番号) 086-235-7219

(FAX番号) 086-225-5991